

秀逸

太陽葬…

渡会 克男

市民会館での戦没者追悼献花式の帰り道。

「空襲を受けるようになってから目立つ服装は避けていたのよ。でも、青春まったただ中でしょ。」

その日、白と青の水玉のワンピースで出かけたの。そしたら、戦闘機が現われて――

ワンピースを空に向かって脱ぎ捨て、

肉袒裻だけで鉄橋の下に駆け込んだという叔母。

（今、その鉄橋の上を快速電車が走り、

もう肌着だけの少女は身を潜めていない）

「でも、市川はまだマシだった。」

今は散骨やら樹木葬やら平和でいいけれど、

あの頃、戦地では太陽葬や虫葬があったのよ」

「あんな男、絶対王子様じゃない」

「そうだよね、馬に乗れないんだものね」

「いろんな男とつきあって、一番いい人と結婚するべきよ」

――他愛ない女子高生達。

「ドラえもんの道具で何が欲しい？」

「人生やりなおし機！」

「そうだよね、あんなに順位下がったんじゃ」

――塾帰りらしい小学生。

背中に垂れ下がるポニーテール、

床に置いた防具袋から漂う汗の臭い。

――鷹のような目力を持った少女剣士。

もう太陽葬も…もない車内で叔母は居眠りし、

私は家並みの向こうに海を探していた。